冬期の保育衛生（其の二）

醫學博士　廣瀬　興

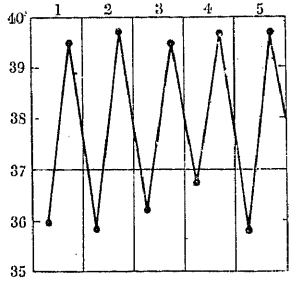
（ロ）弛張性熱型　この熱型は熱の高低に關せず、其日差が甚しく、一乃至一・五度の間に在り是は屢〻熱性諸病例へば腸チフスの第三期、膿毒症、敗血症、結核病等に睹るもので、弛張熱と稱す。この熱型で其日差が、三乃至四度或は其以上の時は特に之を、消耗熱と稱へ、肺結核によく睹る熱型で（第一圖）、午前は三六度一二分なるに、午後三九度以上にも上昇するが如きである。

（ハ）間歇性熱型　之は熱の發作が數時間に亙り、其最高點は甚だ高きも間歇時には體溫健常の者と異ならず、患者は比較的爽快を覺えるのを特徴とするのである。其熱發作は多くは俄然、惡寒戰慄を以て急に體溫上昇し、其下降も亦迅速にして其際、甚しい發汗するを常とす。而して之に次ぐ所の間歇時即ち、免熱時は一定せず、この定型は殊に、マラリアに來るを以て、通常亦本病を、間歇熱と云つてゐる。而してその發作は正しく時期を刻するもので、毎二十四時間に發作するものを、毎日熱と云ひ（第二圖）、隔日四十八時間毎に發作するを、三日熱と云ひ、毎四日に發作するを、四日熱と云ふ。

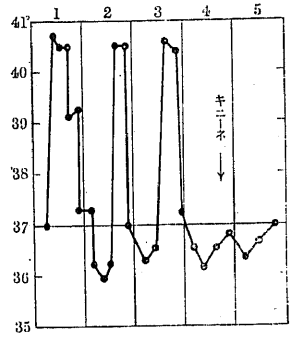
この他間歇性熱型は殊に亦、膿毒症に於て見るが其發作がマラリアの如く整然たらず、間歇時にも多少、熱發有らざることなく、且二十四時間中數回惡寒を以て體溫上昇し、下降の際は發汗し、大に疲勞し、虛脱樣狀態を呈す。

以上の三熱型は各種の疾病に睹るものであるが、この回歸熱と稱する熱型は回歸チフスにのみ特有のもので、多くは惡寒戰慄を以て體溫俄かに上昇し、數日間稽留し、次て發汗を來し再び速かに常溫以上或は以下に降り、之に次ぐに數日の免熱時を以てし、再三初發の如き經過を取る所の極めて特徴のある熱型である。

臨牀上の實驗によるこ人の生命は一定度の高溫に至るまでは之を保續するが久しきに亙るこ危險で例へば腋窩の溫度久しく四一・五度に留るこ、豫後極めて不良なるが如し。但し回歸熱は比較的持續するも危險でないこ云はれてゐる。高熱を來すは多くは神經系統及循環器系統に重要な症狀を呈する場合である。一時的の高熱は良好の轉歸を取るここあり、嘗て、脊髓創傷患者の治癒したもので體溫數回攝氏五〇度に上昇した例の報告がある。



第一圖



第二圖

體溫下降卽ち平常下體溫は三六・二五度以下の場合を云ふのであつて、從來の最下點のレコードは、一二度であるこ云はれてゐる。平常下體溫は、屢〻病的に來るのであつて、

(イ)急性熱性病に於ける分利及虛脫、之は熱性病殊に肺炎の時、急に一日中に高熱より平常下體溫まで下降する所謂、分利の場合の如きで、其際甚しい發汗があり三四度位の低さにもなるが再び二三日中に平溫に復し、脈搏も漸次强實こなり心氣爽快を覺え、治癒に赴く者である。之に反して、虛脫に在つては體溫俄然平溫下に下降し、心臟機能沈衰し脈搏頻數微細こなり、蒼白色こなり、全身脫力し、遂に死戰期こなり致命するここがある。

(ロ)重症の出血、其他慢性疾患殊に心、肺の重症の時平常下に降るここあり。

(ハ)精神病の時に數週の間平常下に下降した例があるが甚だ罕であらふ。(熱項終り)